

## 災害前の記憶やその継承に関する論点

—東日本大震災被災地での「失われた街」の経験から

Issues Regarding Pre-Disaster Memories and Their Inheritance

—From the Experience of a “Lost Homes” in the Area Affected by the Great East Japan Earthquake

磯村 和樹 東北学院大学 教養教育センター  
Kazuki Isomura

### 1. はじめに

筆者は、東日本大震災の復興支援活動である「失われた街」模型復元プロジェクト（以下 失われた街PJ）<sup>1)</sup>に学生時から参加し、長く運営にも関わってきた。神戸大学の槻橋修や震災当時の槻橋研究室の学生が発案したこのプロジェクトは、災害が起きる前の風景や街並みを復元したジオラマ模型制作や、模型を用いて住民等から学生スタッフが被災地の災害前の記憶の聞き取り等を約1週間かけて行う「記憶の街ワークショップ（以下 記憶の街WS）」（写真1、2）<sup>1)2)</sup>などを行ってきた。

本稿ではその経験を踏まえ、災害前の記憶やその継承に関するいくつかの論点の提示を試みたい。



図1 記憶の街WSの様子（撮影 藤井達也）



図2 WSで記録した記憶の例（撮影 藤井達也）

### 2. 災害前の記憶と個々人や地域のアイデンティティ

東日本大震災の被災地での記憶の街WSは何度も開催されたが、その平均来場者数は約400名であり、多くの人から多くの記憶が語られた。筆者も何度も参加したが、「昔を思い出せてよかった」といった感想が聞かれるなど来場された方々からも好評であったように感じる。ふるさとを災害で失った、もしくはその後の復興事業や人口減少の加速等で失われてゆく中で、災害前の復元模型を見ながら思い出を辿ったり、災害前の思い出を語り合ったりすることは、被災地において大きなニーズがあったように感じる。

地域の空間等には人々の記憶が宿り、その記憶は個々人や地域のアイデンティティと深く関連するものだとされている<sup>3)4)5)</sup>。災害による空間等の大規模な喪失は個々人や地域のアイデンティティに大きな被害を与えてしまう可能性がある。記憶の街WSは、被災地の住民等が失われた、もしくは失われつつある自らや自らの地域のアイデンティティを確かめる場として重要だったのではないかと。

東日本大震災は広域的な津波等の影響で空間等の喪失度合いが大きかったため、そのようなニーズが大きかった可能性もあるが、能登半島地震でも火災等で大きな喪失があった地域があると伺っている。そのような特に被害の大きい地域に対して、個々人や地域のアイデンティティを守り継承していくための取組（記憶の街WSのような災害前の記憶を語り合う場づくりなど）をいかに行うかは1つの論点になるのではないかと。

### 3. 災害前の記憶はコミュニティを繋ぐツールになりうる

災害が発生すると様々な要因で元のコミュニティが分散しやすくなる。しかし被災地の復興を考える際には復興事業の合意形成や復興後の持続的なまちづくり等に向けて被災地のコミュニティの維持が基本的な論点となる。

そのような中で、災害前の記憶は、コミュニティを繋ぐ

ツールになりうる。先述のように、記憶の街 WS は東日本大震災被災地でのニーズが大きく、多くの来場があった。WS 会場で久しぶりに知人友人と再会したという場面にも遭遇した。また、元々知人ではない来場者同士が WS 会場で思い出話に花が咲くという場面もあった。分散し現在の日常生活で共有できる話題が減っていく中で、分散する前のふるさとに関する話題は元のコミュニティが共有しやすい話題となりうる。被災地のコミュニティを繋ぐ場づくりとして記憶の街 WS のような催しを行うことにも意義があるのではないだろうか。

#### 4. いくつかの継承の仕方と選択

失われた街 PJ では、記憶の街 WS などの活動を通して災害前の記憶の継承に取り組んできたが、その継承には下記のような種類・段階があるのではと考えている。

- ① 記録する(アーカイブ): 文書や写真等として記録する。もしくは人々の思い出の中に記憶として残るのでも良い。
- ② 伝える: 記録を活用・編集するなどして、積極的に伝えていく。広めていく。
- ③ 復興する: 記録や伝えるだけではなく、災害前の地域のアイデンティティとなっていた地域の空間・ヒト・コト・モノ<sup>6)</sup>を復興する。ただし、元通りにするだけでは、人口減少等の影響で長く続かない恐れがあるので、より持続的になるよう調整しつつ復興する。

失われた街 PJ が取り組んできた①②は主にまちづくり分野の、③は都市計画分野の論点となるのではないかと。

また、人口減少が進む中で、「あれもこれも」から「あれかこれか」へ<sup>7)</sup>などと「選択」の重要性が指摘されている。全てを継承できるわけではないという前提のもと、各被災地に様々な記憶・アイデンティティが蓄積されている中で、その中から何を選び、どの方法で継承していくかの選択が重要となる。

#### 5. 公共私的な記憶

記憶の街 WS では、多くの記憶が証言として記録されるが、その証言を関連する空間等ごとに分類をしていくと、被災地で特に多くの人が記憶していた空間等を把握できる。例えば、岩手県陸前高田市で記録された地域の風景・景観の証言数を整理していくと、図 1 のようになる。

「松原」「山車」など特に多くの人が記憶していた風景等を公的な記憶、それほどではないが複数の人が記憶していた風景等を共的な記憶(便宜的に図 1 の黒枠とする)、特定の個人が記憶していた風景等を私的な記憶とすると、簡単に Web で検索しただけではあるが、公的な記憶はよく復興

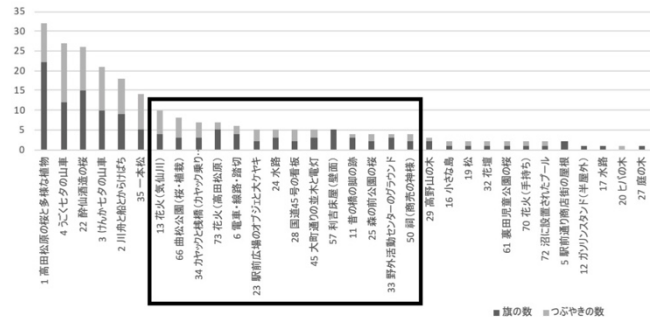


図 1 陸前高田での WS で記録された風景等と証言数 (参考文献 8) の図を一部抜粋・改変)

し、もしくは復興に向けた努力が進められていた。公的な記憶は、もちろん多くの方の努力の上ではあるが、ある程度自動的に③が選択され復興していくのかもしれない。また、私的な記憶はおそらく行政等により③が進められる可能性は低く、他者に伝える必要性も低いため、個人等による①が選択されやすいのではないかと。地域の共的な記憶・アイデンティティをどこまで、①～③のどの方法で継承するかが災害前の記憶の継承の主な論点となるのではないかと。

例えば、石川県輪島市の場合よく報道されている「輪島朝市」は公的な記憶だと考えられる。実際、火災の被害を受けたがすでに復興に向けた努力が進められている。ただ、朝市に比べ認知度は低い輪島で共有されていた共的な記憶があるはずである。それらを探ることが能登半島地震の復興の論点の 1 つになるのではないだろうか。

#### <補注>

(1) 記憶の街 WS の詳細は参考文献 2) 参照。

#### <参考文献>

- 1) 「失われた街」模型復元プロジェクト: <https://www.losthomes.jp/> (閲覧: 2024.4.3)
- 2) 磯村和樹 他: 東日本大震災の被災地における記憶の街ワークショップの手法の変遷 模型制作を通じた被災前の地域空間の記憶の復元手法に関する研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 84 巻, 第 764 号, pp.2139-2149, 2019.10
- 3) 藤森照信: 建築とは何か 藤森照信の言葉, 株式会社エクスマレッジ, 2011.1
- 4) 白井哲哉, 須田努編: 地域の記録と記憶を問い直す—武州山の根地域の十九世紀—, 八木書店, 2016.4
- 5) 牧紀男: 地域の記憶と防災, CIAS discussion paper, No.25, pp.161-162, 2012.3
- 6) 馬場健誠, 後藤春彦: 地域分析のための多様な地理空間情報をひもづけた口述史データの情報特性, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 718 号, pp.2897-2906, 2015.12
- 7) 諸富徹: 人口減少時代の都市, 中央公論新社, 2018.2
- 8) 磯村和樹 他: 津波被災地域における復元模型を用いた地域空間情報保存手法に関する研究—岩手県陸前高田市での復元模型ワークショップで記録された「作り込み」に着目して—, 日本建築学会技術報告集, 第 22 巻, 第 52 号, pp.1173-1176, 2016.10